

ふに此海の底とこなめの岩にて、その間にありかね、土の底とほりたるに、穴いくそばくとなく有なるべし、唐土に鱸穴尾閭澤焦など、あらぬことわりをかまへ出せるも、此たぐひなるべし、落潮のさかりのさまをきくに、波の上に數えらすうすまくが、見るがうちにくばかに心やをちいりてふかく入り、海づら高くひきく、際だて、彼渦の中へ瀧をなして落る、そのひゞきは山とゞろき巖ゆする、此南より北より落くるうしほ、こゝに行あふほどに、山のごとき波をおとすめり、その潮のとき事、矢をたとふるもにぶく、みるにめくるとなん、今少しはやかからば、それを見るべきにと、口々にうらむるに、峯久は耳を何方へもやら、まほしげなり、とかくするほどに見し波も、まづまりぬ、正民は猶はらふくらせるをなぐさめて、翁

立かへりまたきて見よや高波を鳴門の神やとくまづめけん、よしやくる、まで有て、さす潮をだに見んとて、正民も翁も磯にくだり、はだか島に上らんとするに、○下略

〔西遊記五〕興次兵衛瀬

中國の九州と分れたる地は、長門の國と豊前國なり、赤間が關と内裏とさしむかひて、纔に一里の海をへだてたり、小倉へは筋違にて三里なり、此所兩國の山迫たれば、海の幅狭く、さし潮引しほともに、其汐先き甚急にして、誠に大河の如し、其故に此所の渡海は、汐の満合たる時にのみわたる事なり、汐先きには渡海なし、予○橋南溪が赤馬が關にいたりし時に、渡りの時刻を過て、便船一艘もなく、明日まで逗留すべしといふ、いたづらに時日を移さん事も心なくて、纔なる海の面なれば、何とぞして渡るべき手だてやなきと人に問ふに、獵船をかり切りて渡り玉は、今半時が程猶わたるべしといふ、さらばとていそぎ獵船をかり、予僕と二人、船頭二人、都合四人乗て渡りぬ、初の程はさまなかりしが、中流に至れば、誠に大河の如く、逆卷大波漲り落つ、常に手なれし船頭なれど、急流に押落されて、遙に筋違にこそ渡りぬ、其水勢只川の如くにて、海のやうにあらず、